

# 高知城三ノ丸跡

石垣整備事業に伴う試掘確認調査概要報告書

2001年3月

財団法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター



## 序

高知城跡は、国の史跡として県民からも親しまれ、特に現存する天守閣は全国的にも貴重な重要文化財です。財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターでは、高知県教育委員会の委託を受けて石垣整備事業に伴う高知城三ノ丸跡の試掘確認調査を実施しました。

本書は、平成12年度に実施した高知城三ノ丸跡の試掘確認調査の成果概要をまとめたものです。長宗我部氏が構築したと考えられる天正年間の石垣の検出や桐紋瓦等も出土しています。この概要報告書が埋蔵文化財の保護・保全、さらには今後の考古学研究の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施や概要報告書の作成にあたっては、関係各位の多大な御協力や御指導を頂いたことに、厚く御礼申し上げます。

平成13年 3月

財団法人高知県文化財団  
埋蔵文化財センター  
所長 門田 伍朗



## 例言

- 1、本書は、高知城三ノ丸跡石垣整備事業に伴う試掘確認調査の概要報告書である。
- 2、高知城跡は、高知市丸の内に所在する。
- 3、調査は、高知県教育委員会の委託を受け、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。試掘確認調査は平成12年8月1日から平成12年11月17日まで実施した。試掘確認調査面積は、320㎡である。
- 4、本概要報告書の作成・執筆は、松田直則・大野佳代子・佐々木志穂が分担し編集は松田が行った。
- 5、出土遺物実測図の縮尺は、土器・陶磁器は1/3、瓦類は1/4(桐紋は1/2)で統一している。
- 6、出土遺物、その他図面類の関係資料は財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。
- 7、調査では、下記の諸氏・諸機関より御協力・御指導頂いた。(敬称略、順不同)  
五味盛重・伊藤太作・北垣聡一郎・中井均・市村高男・高知県教育委員会・高知城管理事務所
- 8、正保城絵図第56保舗土佐国は、国立公文書館から承認番号(263)平成13年2月27日で許可を受けた。さらに寛文九年高知廓中絵図は高知市民図書館、高知御家中等庵図は安芸市歴史民俗資料館から掲載許可を受けた。

## 本文目次

|            |       |
|------------|-------|
| 調査に至る契機    | （松 田） |
| 高知城の沿革と概要  | （松 田） |
| 調査の方法      | （大 野） |
| 調査の成果      |       |
| 1、検出遺構     |       |
| 1) A区      | （松 田） |
| 2) トレンチ調査区 | （大 野） |
| 2、出土遺物     |       |
| 1) 土器・陶磁器  | （松 田） |
| 2) 瓦       | （佐々木） |
| まとめ        | （松 田） |



## 調査に至る契機

史跡高知城跡は、天守や追手門など重要文化財に指定され高知県民の誇るべき歴史的文化遺産である。平成4年度に史跡高知城跡整備基本計画策定の一環として実施された石垣診断調査で、全体的に石垣の孕みや陥没が生じていることを指摘された。その中で特に三ノ丸南側と天守南側石垣については、安全性を考慮し危険箇所の修理等の措置が必要であることが報告された。平成5年度には、石垣保存対策の一環として石垣浮き石修理や、三ノ丸縁辺部排水対策・樹木整備が実施され、同時に石垣変動調査も行われた。さらに防災面で万全を期すため平成9年度には「高知城石垣対策専門家会議」を発足させ指導・助言を得ることにした。この専門家会議で、高知城の石垣対策において現状把握の必要性が指摘され、

平成10年度に歴史・地質・建築等の専門家による「高知城石垣調査委員会」が設置された。この調査委員会では、石垣全般について現況の総合調査を平成10・11年度に実施し、平成12年3月に報告書が刊行されている。

平成12年度については、本丸黒鉄門南側石垣と三ノ丸の石垣について精密測量を実施し、石垣解体整備の範囲が石垣対策専門家会議によって決定された。この決定に基づき、三ノ丸の石垣解体工事で影響が及ぶ1200㎡の範囲の内、試掘確認調査として320㎡の調査を実施した。



高知城天守と追手門



本丸黒鉄門南石垣隅角部



本丸黒鉄門南石垣



三ノ丸東石垣



# 高知城の沿革と概要

## 1. 高知城の沿革

山内一豊が慶長6（1601）年8月に高知城築城に着手する。百々越前守安行を総奉行に任じ、子供の出雲に補佐させた。慶長8（1603）年本丸、二ノ丸工事が完成する。慶長16（1611）年に三ノ丸が完成する。その後享保12（1727）年越前町より出火し、御城へ火が移り大火事となっている。城内は、この火災で追手門他数棟を除き多くを消失している。享保14（1729）年から普請御初を行い、延享2（1745）年二ノ丸を再造しその後寛延2（1749）年本丸に続き宝暦3（1753）年三ノ丸の作事が完成している。

山内時代以前の大高坂山は、佐伯文書によると大高坂城の名前が見え南朝方の大高坂松王丸が居城しており、北朝方と激戦を展開したとされている。考古学的に南北朝期の遺物

が平成5年度の伝御台所屋敷跡の調査地点から検出できており、この時期大高坂山が城跡として利用されていたことがわかる。その後、永禄年間頃長宗我部元親に攻められその支配下に移る。これまでの説では、長宗我部元親が天正16（1588）年に拠点となる城郭を岡豊山からこの大高坂山に移転し城下町形成も手がけたとされている。この長宗我部氏が大高坂城を支配下においた永禄段階の明確な遺構は検出されていないが、出土遺物として貿易陶磁器等が出土していることから何らかの機能を果たしていたと考えられる。さらに平成12年5月に実施した本丸黒鉄門の試掘調査でも石垣盛土層から16世紀後半代の備前焼や貿易陶磁器等が出土しており、本丸も含め今後長宗我部期大高坂城の検討を要する資料が出土している。



高知城本丸天守閣

平成5・6年に、実施された伝御台所の調査地点で、現在整備され公園となっている。



平成12年度に、石垣整備に伴う試掘確認調査が実施された地点で、黒鉄門の前面は現在スロープ状になっているが、調査では階段状になっていたことがわかった。



## 2. 高知城の石垣について

山内時代石垣構築の穴納役は、北川豊後と文献では記載されている。高知城石垣の石材は、本丸や二ノ丸周辺はチャートの自然石を多く使用しており慶長8（1603）年には完成している。

三ノ丸は、浦戸城の不用なものを取り壊して舟で浦戸湾から江ノ口川へ運び、その一部を使用したとされている。



本丸南石垣

その他は周辺の久万・万々・秦泉寺・円行寺（御城築記では円行寺にかえて朝倉と記載されている）から取り寄せており完成時期は慶長16（1611）年である。

現存する石垣を観察すると、本丸石垣と三ノ丸石垣は石質の違いやその勾配も異なり文献で認められる時期差を感じることができる。



三ノ丸東石垣



三ノ丸北石垣隅角部

慶長16年以降の石垣修築について、宝永2（1705）年三ノ丸北の奥の石垣が崩壊した記録が残っている。山内家資料第五代豊房公記第20巻には、石垣崩壊から修築の時間的経過や崩壊した範囲、石の採取・運搬・修復役人などが詳細に記載されている。宝永2（1705）年に崩壊し修築した石垣は、隅角部を見ると砂岩の切り石を使用し全体的に砂岩を多く使用している。さらに砂岩の石は矢穴痕が観察できる。石の採取は、円行寺口と春野町の東諸木からの記載が見られるが、砂岩の石は東諸木から運搬されたものと考えられる。



三ノ丸北石垣に見られる矢穴痕





二ノ丸東石垣で人から右がチャートで占める石垣部分、左部分が砂岩が多く改修された石垣部分



三ノ丸北東石垣隅角部



二ノ丸東石垣

二ノ丸東石垣の砂岩石に残る矢穴痕。数カ所に認められる。



その他、二ノ丸東石垣（写真上）も改修されていることがわかる。二ノ丸東石垣の南側部分を見ると、チャートも使用されているが砂岩が多く使用されている。三ノ丸に入る門跡の部分にかかる石垣隅角部はチャートの割り石で占められるが、築石部の砂岩には矢穴痕（写真右下）が観察できる。いつの時期に改修されたかは不明であるが、北側部分の石垣がチャート石の野面積みで本丸と同手法で構築されていることなど、あきらかに北側と南側では石積みの差が認められる。



### 3. 城絵図について

高知城の絵図については、山内築城以後江戸時代に描かれたものとして、正保年間の絵図・慶安5年の絵図・寛文9年の絵図が残されている。さらに、宝永2年の絵図が描かれているが現在所在が不明である。この宝永2年の絵図を元に明治6年に測量され明治年間に描かれた絵図も4枚程あり、現在所在不明のものが2枚とその他の2枚は県立図書館に保管されている。正保の城絵図で三ノ丸を見ると、東北の場所に丑寅櫓が描かれている。慶安5年の絵図も同様に描かれており、三ノ丸の規模・形状も近いものであることから、正保の城絵図の写しと考えられる。



正保城絵図土佐国絵図（内閣文庫所蔵）



寛文九年高知廓中図（高知市民図書館所蔵）



## 調査の方法

三ノ丸石垣整備箇所におけるトレンチ設定は、石垣裏ゴメ石面までの状況把握と周辺部の遺構確認の為に植樹を避けて設定した。トレンチは、南端部に3本、東端部に3本設定したが、北寄りのトレンチ2本については調査途中で旧石垣の全面検出の為に連結し、さらに北・西方向に拡張させてA区とした。その他の各々のトレンチを1～4とした。各トレンチは、現石垣にほぼ直行して幅2～4m、長さ5～10m大で、深さは約1m程掘り下げた。トレンチ4（三ノ丸南東隅部分）は、石垣間が狭く危険な為、深さも裏ゴメ石が顕著になる50～60cm程の深さに留めた。A区については、これまでの調査で埋没する石垣の存在が確認されていた地点を中心に調査範囲を広げた。各々の調査目的は以下の通りである。

Wトレンチ：地山地形及び遺構分布の確認、礎石の有無。Nトレンチ：旧石垣東隅角部の追跡、礎石の有無。Sトレンチ：地山地形及び遺構分布の確認。さらに、旧石垣背面の構築状況把握の為に、A区グリッドC2～D2内に東サブトレンチA、西サブトレンチBの2本を設定した。

測量については、平成7年度に設定された基準点を引き続き利用し、公共座標に即して調査区内のグリッドを組んで実施した。平面実測は100分の1、土層断面は20分の1のスケールを採用した。

調査の手順としては、調査対象地の表土及び無遺物層は重機を使用して除去し、石垣裏ゴメ石面付近からは手掘りで行った。旧石垣サブトレンチA・Bでは、裏ゴメ石を各層ごとに記録をとりながら取り外した。A区の完掘状況については空中撮影を行い、調査を終了した。調査終了時にはシート、土嚢袋により遺構面の保護を行った。

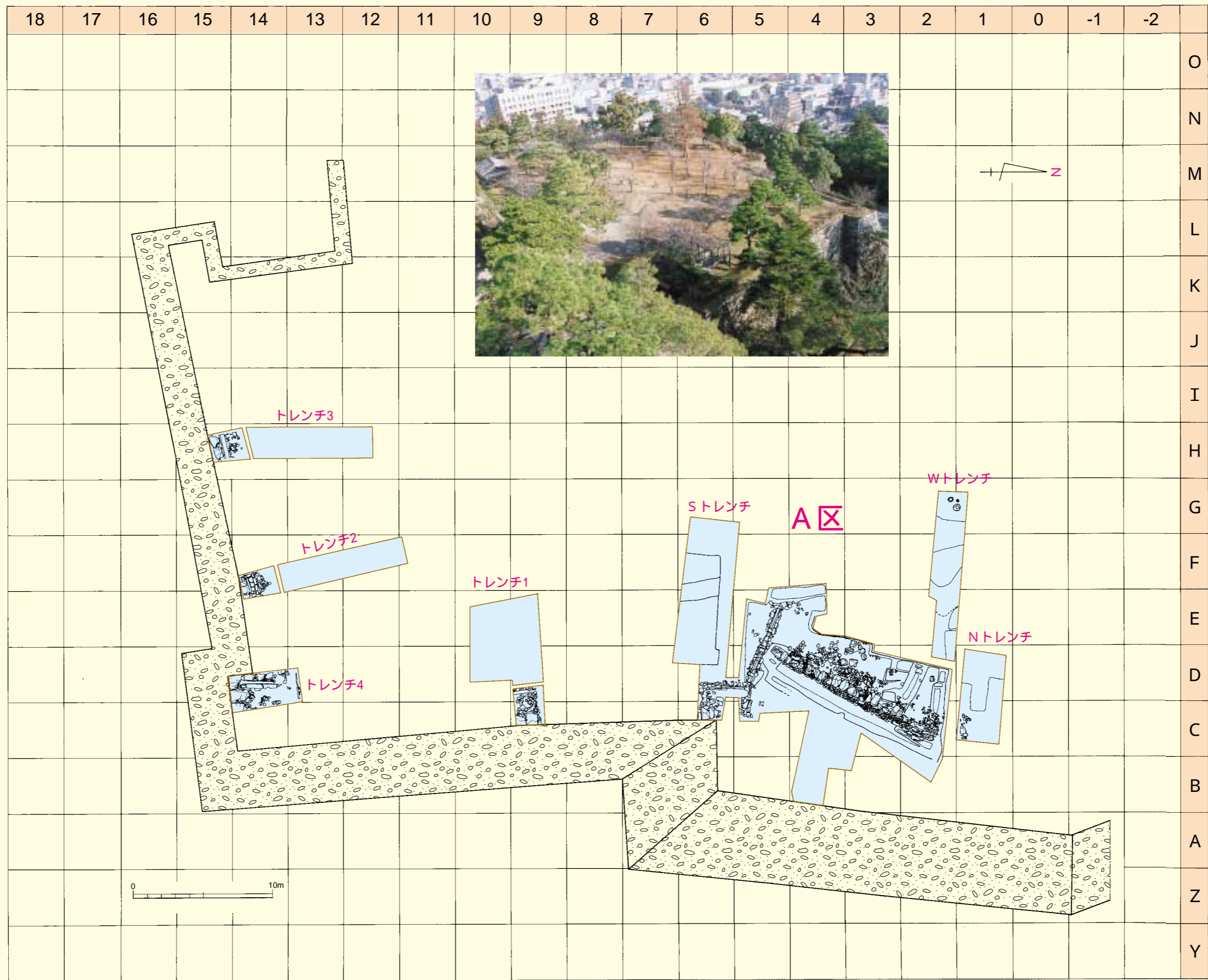


高知城三ノ丸跡調査対象地位置図 (S = 1/2000)









三ノ丸跡 遺構全体図



# 調査の成果

## 1. 検出遺構

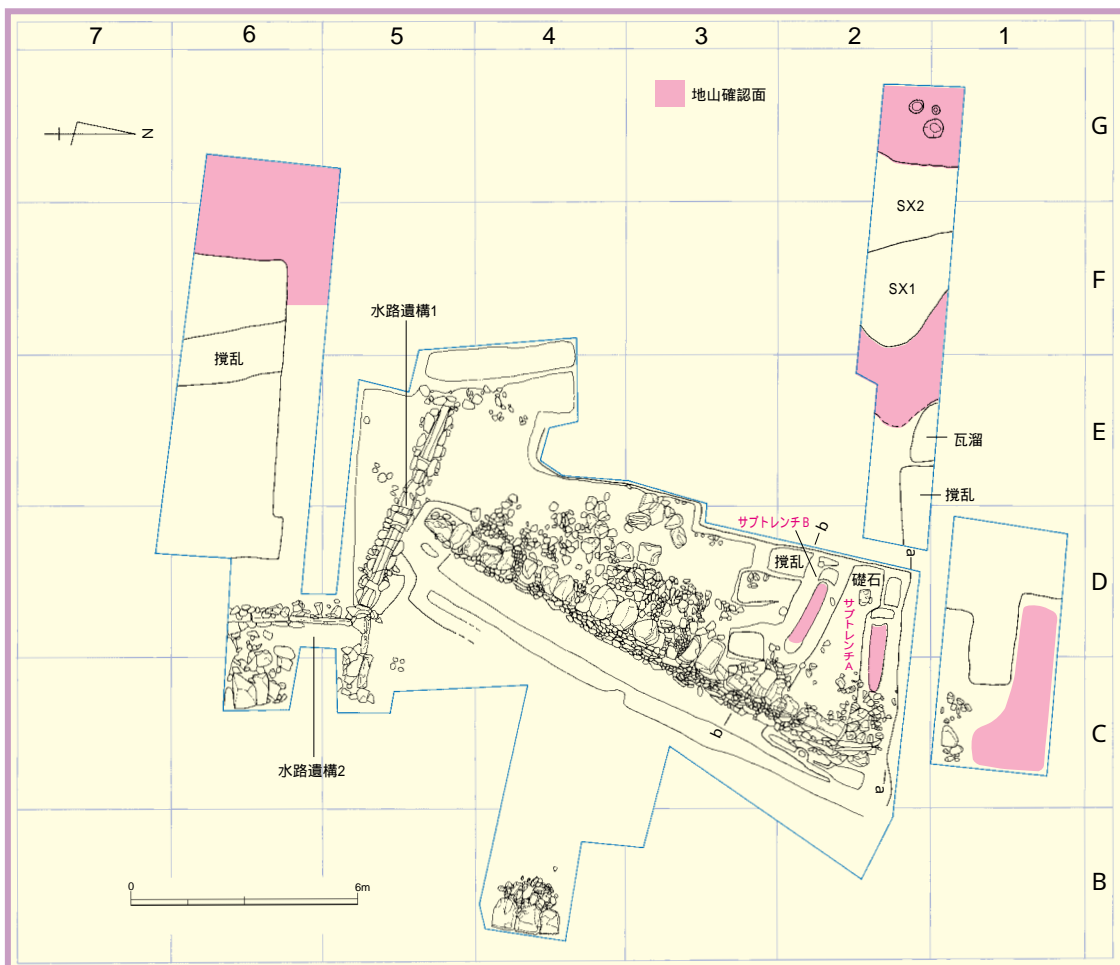
### 1) A区

今回の三ノ丸の試掘確認調査A区からは、現存石垣の裏ゴメ状態や排水機能を持つ水路遺構、旧石垣等を検出した。A区のSトレンチにおける現存石垣の裏ゴメの状況は、幅1mで破碎礫が使用されている。さらに裏ゴメの上部に切り石を用いた水路遺構が構築されている。水路遺構の側石は切り石で底部はハンダで固めている。これらの遺構は、時期を決定する出土遺物は確



A区空中写真

認できなかったが、現存石垣の裏ゴメ上層に構築され切り石を使用していることや、水路遺構1と2の連続性から近世後期の時期に構築されたと考えられる。



A区遺構全体図



A区では、旧石垣裏ゴメ部分にサブトレンチAとサブトレンチBを設定し、裏ゴメ堆積状況を調査した。

### サブトレンチA

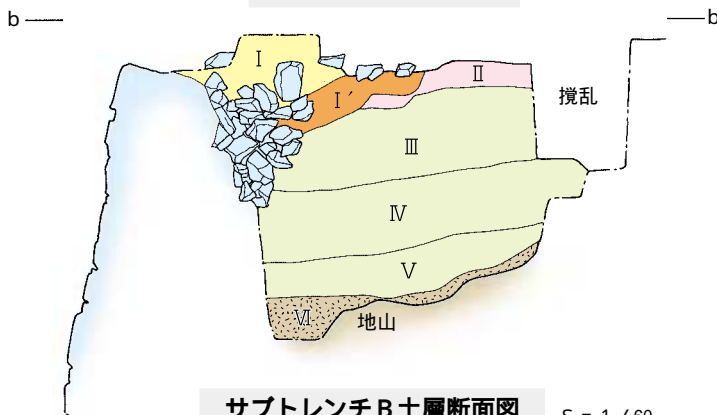
A区旧石垣の背面北端に設定した。層(表土)を除去すると、層は橙色~褐色礫土をベースにした盛土層で、風化した地山礫の堆積した層の下層が岩盤となる。旧石垣より東側は昭和40年に行われた現存石垣解体時や昭和の攪乱が旧石垣前面まで及んでいる。僅かに残る層は山内期に改修された旧石垣上部の裏ゴメ土と考えられる。サブトレンチA~B間の層上面は、江戸期と考えられる旧表土面で、礎石1石を検出した。北壁際の層中より長宗我部期の桐紋軒丸瓦が出土している。層(明赤褐色土)は強く締まる整地層である。裏ゴメ上部分は層を切って層(裏込石含有)が入り込む。層から層までは水平に堆積している。層(褐色土)・層(明赤褐色土)は、東側に斜面堆積しており、旧石垣構築当時の裏込土の層となる。岩盤は、西側部分で標高29.0m、東側裏ゴメ部分で標高28.1mを測り、比高差0.9mで東側に急激に落ち込んでいる。旧石垣面直下では標高27.3mを測る。

### サブトレンチB

A区旧石垣の背面、サブトレンチAの南隣に設定し



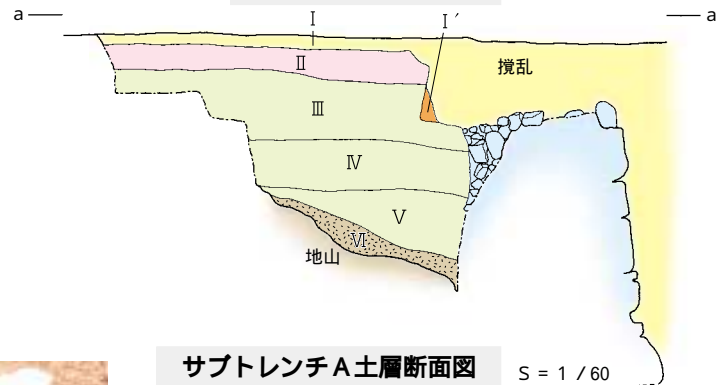
サブトレンチB断面



サブトレンチB土層断面図 S = 1 / 60



サブトレンチA断面



サブトレンチA土層断面図 S = 1 / 60

層は概ねサブトレンチAと同様の土層を呈するが、サブトレンチBは東にやや傾斜して盛土される。整地された層上面は旧石垣天端石と標高がほぼ同レベル(30.15m前後)で、旧石垣構築当時の地表面であろう。裏ゴメ石は層中から層上面まで確認できる。地山面(岩盤)は、西側で標高28.7m、東側で28mを測り比高差0.7mで、急激に裏ゴメ部分に向かって落ち込み、旧石垣面直下に至り標高27.2mを測る。地山面の標高は、サブトレンチAも同様に西側が高くなっており、Wトレンチ東隅の地山面へと続く。Wトレンチの地山面は、平坦で三ノ丸の曲輪を構成する。

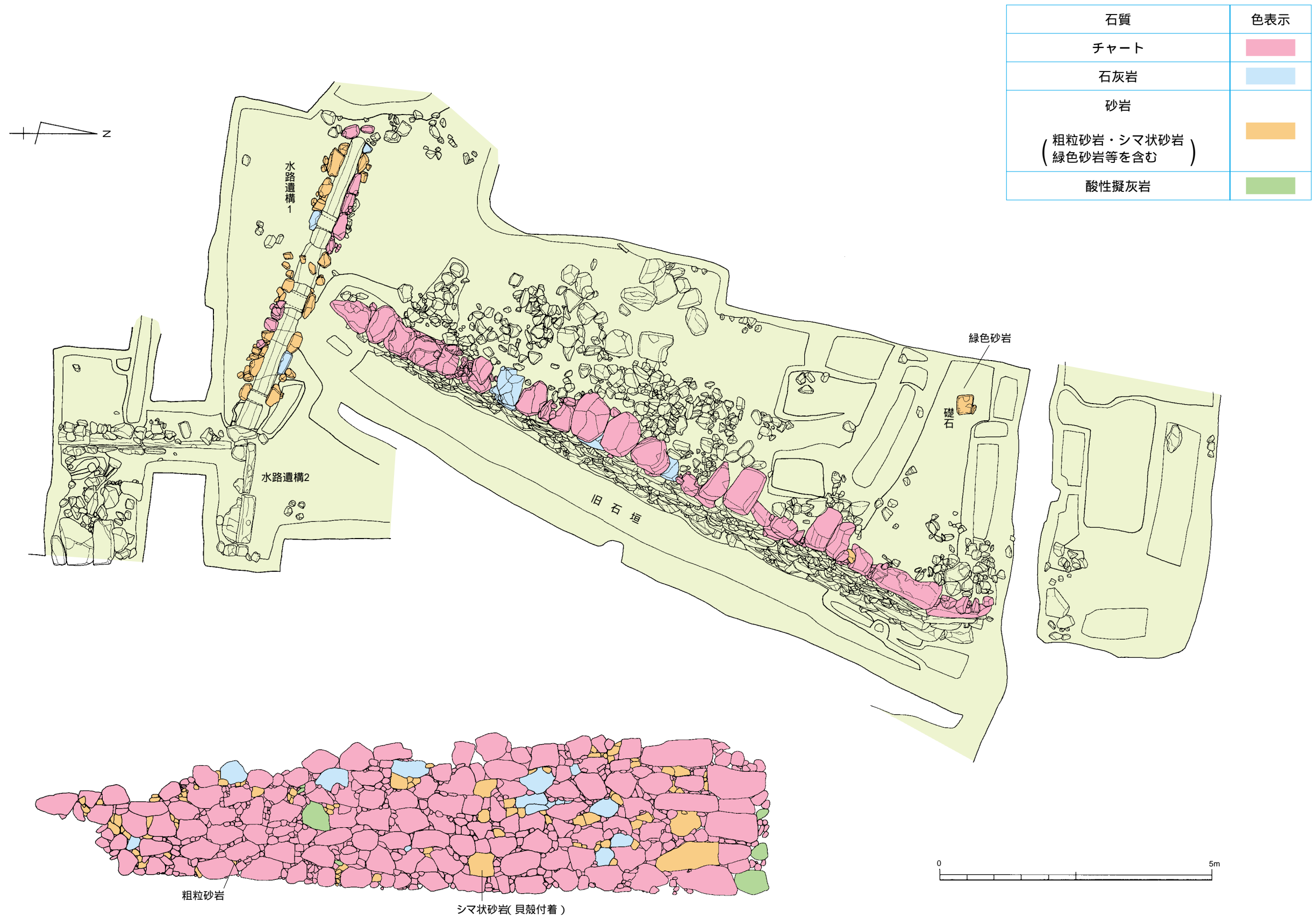


桐紋瓦出土状況









石質 分類図





旧石垣検出状況

### A区旧石垣

現存石垣の裏側8mの地点で、現存石垣より古い時期に構築された旧石垣を検出した。この旧石垣は、本丸と同様に自然石を積み上げている。高さ2.7m、長さ13mの規模を持つ。旧石垣の隅角部は、シノギ角になっており6石が算木状に積み上げられているが完成した算木積みではない。石材は、主にチャートの自然石が利用されているが一部に石灰石や砂岩も用いられている。乱積みであるが、築石部は横目地が部分的に通る。石垣間の詰石にはチャートの破碎礫や砂岩の破碎礫を多く詰め込んでいる。特に石灰岩を使用している石の周りには詰石が多く強度の弱い石材を補強している。

旧石垣は、裏ゴメ部分のトレンチ断面層序の観察から上端2石目以上が修築を受けていることがわかる。石垣裏の盛土の堆積状況や桐紋瓦の出土状況から桐紋瓦が廃棄された後に改修されたと考えられる。これらのことから山内氏によって改修されたとみることができる。現存する石垣が文献では慶長16年に完成していることから、その旧石垣上端2石目までの改修は山内入城の慶長6年以降と考えられる。旧石垣の2石目より下の基礎部分は、盛土の層で中世の遺物しか出土していないため、長宗我部期に構築されたものと考えられる。

A区では、NトレンチやSトレンチで地山面を確認することができ、大高坂期の遺物も出土した。三ノ丸は、地盤が悪く狭小であった為中高坂（現在は円満寺の森）の山を崩し大部分盛り土したとされる文献記述（皆山集P618）とは若干様相が異なる。調査成果から地山形成面の復元をしてみると、東側は旧石垣の盛り土部分まで地山面が残り、二ノ丸東面石垣端部から旧石垣まで東西幅約50m・南北幅約60mの丘陵が突出した地形であったと考えられる。北・南部は切り岸を利用した自然傾斜であったと考えられる。さらに大高坂期から長宗我部期にかけての遺物が出土していることから、三ノ丸は部分的には大高坂期から既に中世城郭として利用されており、その後長宗我部氏によって改修され、さらに山内氏によって現在の曲輪に整えられたと考えられる。



旧石垣の上端部と礎石



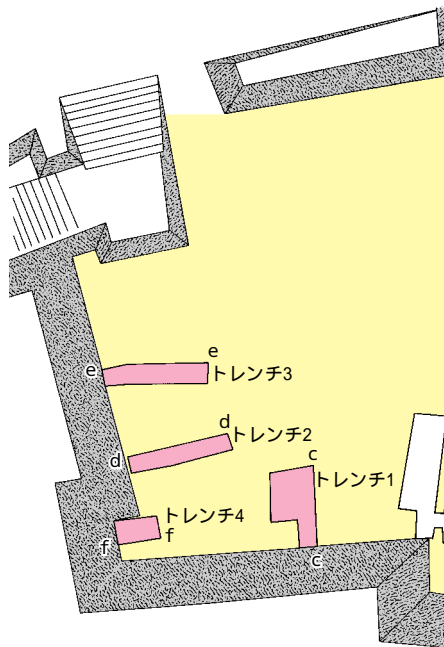
水路遺構1



## 2) トレンチ調査区

三ノ丸縁辺部では、トレンチ1から4までを設定し調査した。現存石垣裏ゴメの背面は盛土で構築されており、トレンチ設定箇所では江戸期の遺構は瓦溜遺構しか検出することができなかった。

正保城絵図等の高知城絵図面では、矢狭堀が記載されているが今回の調査では確認できなかった。しかし本丸の矢狭堀を参考にと、切り石と石垣上面を利用した可能性もある。現存石垣の背面空間は、数時期にわたる盛土が施されているのみで一部瓦溜を検出することができ、建物等は存在していなかったと考えられる。



トレンチ配置図 S = 1 / 800



本丸矢狭堀現況裏



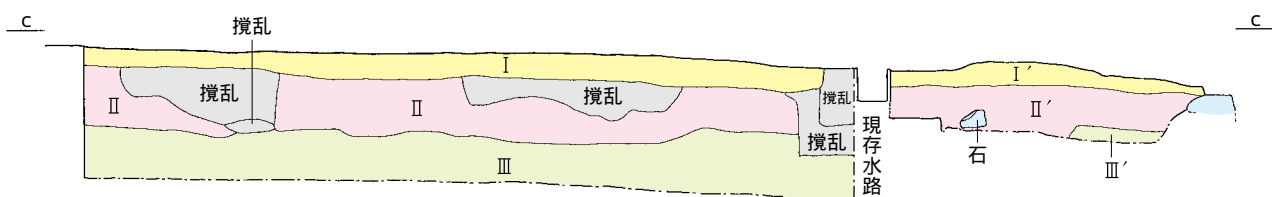
トレンチ1断面



トレンチ1現存石垣裏ゴメ・水路遺構

### トレンチ1

南端部西寄りに設定。南北に向けてはほぼフラットに盛土。層に瓦を含む。層の下位で暗赤褐色粘質土の薄い層を挟みながら南に向けてやや傾斜している。石垣より約1.5m西の裏ゴメ部分で層下位に検出された水路遺構は、切り石（やや粗）とハンダ（黄灰色）で構築されており、A区の水路遺構2に繋がる位置に存在する。ハンダはブロック状に破壊された状態で裏ゴメ部分に散在していた。北西隅を1.5mの深さまで掘り下げたが、地山面は確認できていない。



トレンチ1土層断面図 S = 1 / 60



## トレンチ 2

南端部東寄りに設定。

Ⅰ層（褐色礫質土）は客土で、天端石より北に6.5mの範囲に亘る。

層は締まりのよい整地層。

Ⅱ層（青灰色砂礫層が入り込む）にも瓦を含む。攪乱部分は角礫、瓦を充填。石垣際のⅠ層下に、切り石（やや精）とハンダ（薄橙色）による矩形

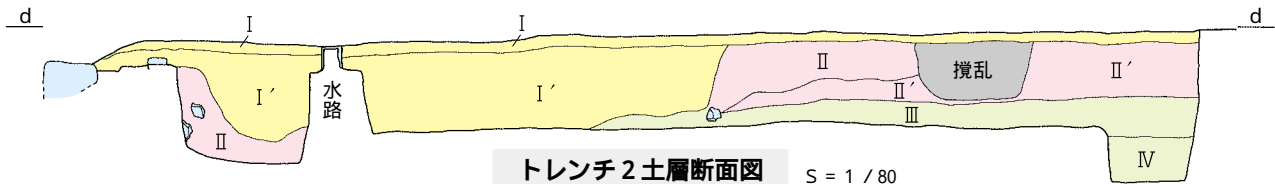
の水路遺構が残存。幅50～60cm、確認できる深さは約15cmを測る。裏ゴメ石は水路遺構の下までに多く、後は新水路の影響を受けており散在する程度。北端部を1.5mの深さまで掘り下げるが、地山面は確認できていない。



トレンチ 2 現存石垣裏ゴメ・水路遺構



トレンチ 2 断面



トレンチ 2 土層断面図

S = 1 / 80

## トレンチ 3

南端部西寄りに設定。

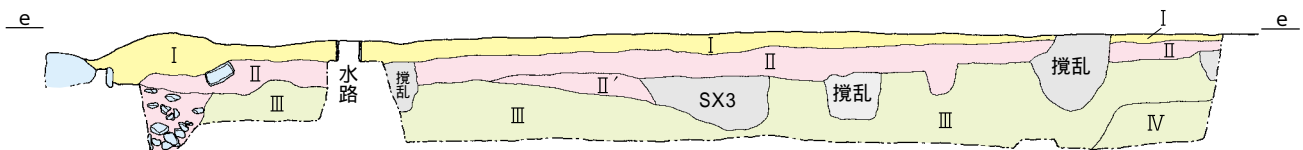
Ⅰ層は昭和以降の盛土層で、電気配管、土坑などが掘り込まれて多量の瓦、陶磁器類が出土。Ⅰ'層（焼土混じり）Ⅱ層以下が石垣に伴う盛土層で、層上面が石垣とほぼ同じ高さに整地されている。SX3はⅡ層に掘り込まれた瓦溜である。



トレンチ 3 現存石垣裏ゴメ・水路遺構



トレンチ 3 断面



トレンチ 3 土層断面図

S = 1 / 80

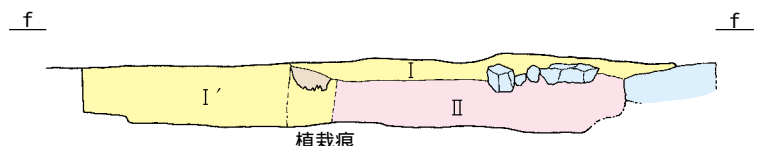
Ⅰ層は瓦の他に中世～近世初頭の遺物を伴う。トレンチ 2 より続く水路遺構は北面切り石が崩れ落ち、Ⅱ層中に移動。裏ゴメ石も水路遺構下までに留まる。全体を1.1mの深さまで掘り下げるが、地山面は確認できていない。



トレンチ 4 現存石垣・水路遺構

## トレンチ 4

南東角部の西半分を設定。Ⅰ層を除去すると、50cm程の深さで裏ゴメ石面が確認できる。植樹以外はさほど改変を受けていない。Ⅰ'層は新水路に伴う攪乱部分。トレンチ 2 より続く水路遺構は突出した石垣の形状通りに南に曲がり東へ向かう。南側天端石の石尻は削り込まれて水路の底面に利用か。一方、トレンチ北端に僅かに残存する東西方向の水路遺構は、トレンチ 1 の水路遺構と似た様相を見せる。



トレンチ 4 土層断面図

S = 1 / 60

## 2. 出土遺物

三ノ丸からは、土器・陶磁器の他に瓦・鉄製品・石製品等が出土している。ここでは、主な土器・陶磁器と瓦について紹介する。

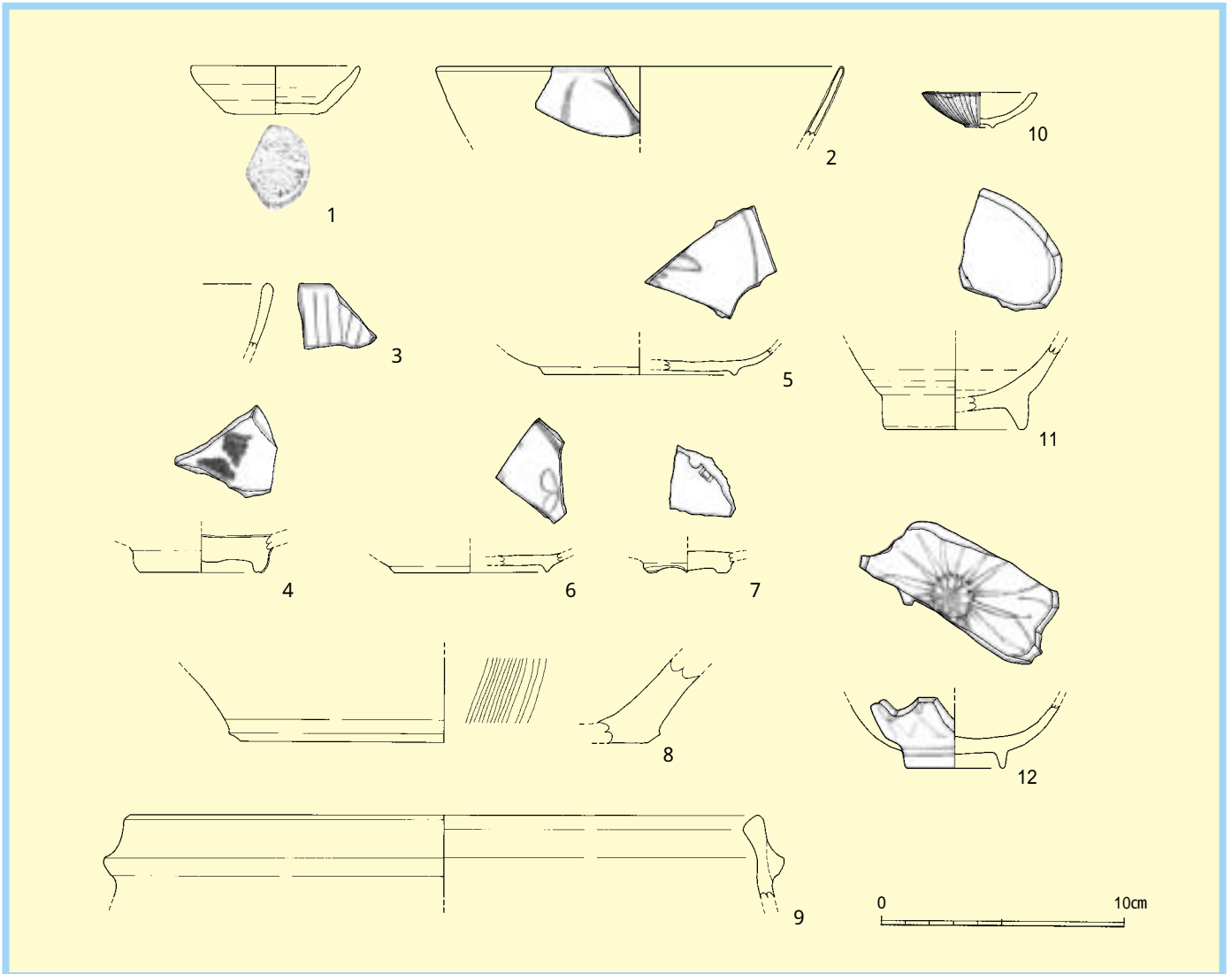
### 1) 土器・陶磁器

三ノ丸からは、中世の遺物として土師質土器小皿(1)と鍋(9)、貿易陶磁器の青磁碗(2・3・4)、青花皿(5・6)、白磁皿(7)等が出土した。国産陶器では、備前焼播り鉢(8)が見られる。近世では、肥前系磁器の紅皿(10)や碗(12)、瀬戸系の陶器碗(11)が出土している。その他、肥前系陶器や志野の向付破片(13)等も見られる。

中世では、青磁碗(2)や白磁皿(7)の特徴に認められるように15世紀代の遺物が出土している。この時期は、大高坂氏がこの城を支配しており三ノ丸も曲輪として利用していたことがわかる。さらに15世紀後半代の県内遺跡から多く出土する土師質土器の鍋(9)も出土している。青磁碗の線描き蓮弁文の碗(3)は16世紀代の遺物で、特に青花皿(5・6)等は、長宗我部氏が大高坂入城以降の遺物の可能性がある。土器・陶磁器類の遺物は比較的少ないが、三ノ丸の変遷を考えるうえで重要なものが出土している。



出土遺物



出土遺物実測図



## 2) 瓦

三ノ丸は、A区や各トレンチから多量の瓦が出土しているが、攪乱からの出土が多い。その他に、A区Wトレンチやトレンチ3の瓦溜からも多く出土している。調査現場で軒丸瓦・軒平瓦・刻銘瓦・コピキAの丸瓦を選別・分類し整理をおこなった。A区では、平瓦約500枚、丸瓦約350枚、棧瓦と確認できるもの約20枚、丸棧冠瓦と確認できるもの約30枚、軒丸瓦約50枚、軒平瓦約100枚が出土している（これらの数量は全て復元推定である）。ここでは、重要と考えられる軒丸瓦と軒平瓦の分類を行うことにする。今回の調査では、特にA区旧石垣の裏ゴメから出土した桐紋の軒丸瓦が目立され、さらに山内氏の家紋瓦である三葉柏紋の軒丸瓦も出土している。

今回、軒丸瓦・軒平瓦などの軒瓦は瓦当面の紋様により分類した。今回の分類は完全ではなく、範の違い（具体的には珠文数・圏線の有無・巴頭部の大小・巴尾部の長短など）からの分類が必要であるが、この概要報告では大分類・中分類にとどめ、詳細は各分類の説明で述べる事とした。

### 軒丸瓦

#### I類 桐紋瓦

今回の調査では1点のみの出土である。この桐紋瓦の特徴的な事は、3枚の葉が水平に並ぶ事である。また、3枚の葉に前後がなく、中心葉に右葉が描かれている事が確認できる（中心葉の右下と、若干であるが中心葉の右上）。中心葉の右上の葉脈の切れ具合から見て、中心葉に描かれた、右葉の右上と右下の線は繋がるのだろう。葉には欠刻がないが葉脈は描かれている。花蕾は、右枝についているものが菱形、左枝についている物が三角である。この違いは、紋様自体のものではなく、範がつぶれていたと考えるのが妥当ではないだろうか。



#### II類 三葉柏

##### - 1類 (珠文がない三葉柏)

山内家の家紋である三葉柏である。今回の試掘では6点の出土である。その中でも葉脈が描かれているもの、描かれていないもの（描かれていたが磨耗して確認できなくなっているだけという可能性も考えられるが）の、2種類がある。胎土は葉脈が描かれているものは茶褐色の胎土で、葉脈がないものは黒っぽい胎土でハナレ砂が目立つという違いが見られる。葉脈が描かれているのは3点であった。葉脈があるものと、ないものの時代的な差があるかは、瓦溜りや攪乱層からの出土であるため、層序からの判断は難しく、はっきりとは分からない。しかし現在の高知城に葺かれている三葉柏には葉脈がはっきりと描かれている。



- 2 類 (珠文がある三葉柏)

今回の試掘では1点のみの出土である。珠文のある部分が凹部になり、三葉柏の部分は円形の凸部になっている。珠文数は復元推定で16個、比較的大きい珠文で、葉は - 1 類より細身である。胎土は灰色で珠文のない - 1 類より滑らかである。

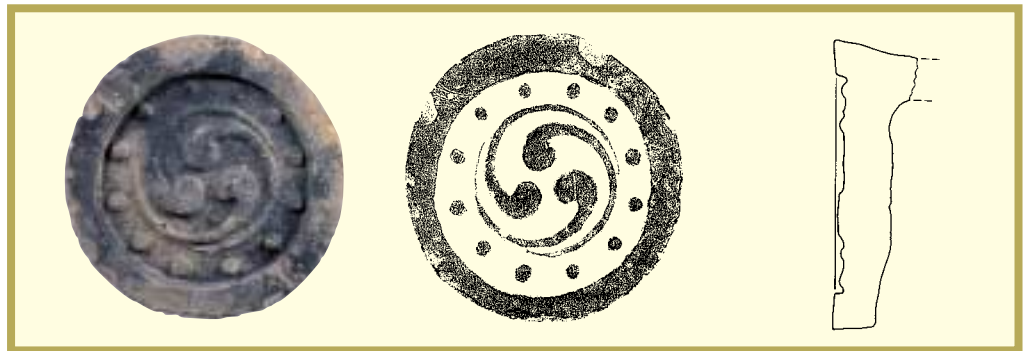


Ⅲ類 三巴紋

これは多く出土している。具体的な数,重量はまだ出ていないが、コンテナ6~7箱程出土している。同じ三巴紋でも、巴の巻き方(右巻き・左巻き)、珠文数などにより様々な形式のものがある。そこで、三巴紋をさらに3つに分類した。分類の方法は巴が右巻 - 1 類, 左巻 - 2 類とし、左巻はさらに珠文数12・14 - 2 - a類, 珠文数15・16 - 2 - b類としている。そして文中において巴頭の大小・巴尾により小分類を試みた。分類の対象としたのは、比較的完形に近い38点である。

- 1 類 右巻き三巴紋

右巻きの三巴紋は38点中14点である。そのうち、珠文数12が12点、珠文数14が2点である。珠文数12の中でも巴頭が鉤状、圏線があるものが3点ある。残りの9点であるが、巴頭が丸いものである。この9点の内、圏線があるものが6点、ないものが3点ある。圏線がないものも巴尾が長い(上図)。このタイプは現在高知城に蔵かれているものに限り無く近い。珠文数14は巴頭が丸く、巴尾が伸び、次の巴の巴尾に先端だけついており圏線と呼べるかはわからない。



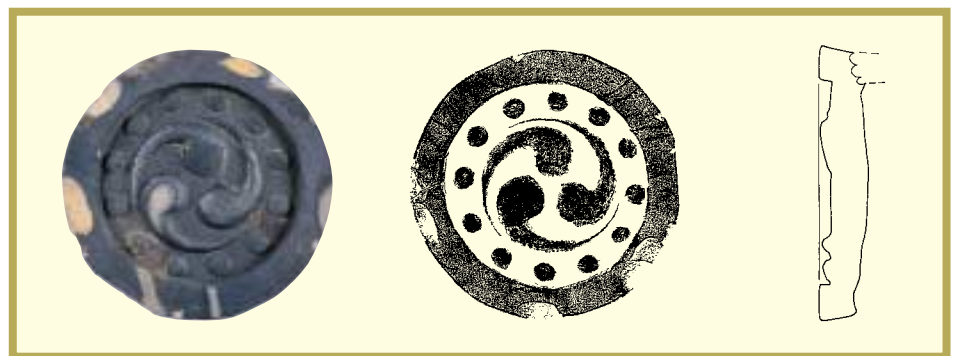
このタイプは現在高知城に蔵かれているものに限り無く近い。珠文数14は巴頭が丸く、巴尾が伸び、次の巴の巴尾に先端だけついており圏線と呼べるかはわからない。

- 2 類 左巻き三巴紋

左巻き三巴紋は、右巻き三巴より多く、24点の出土である。珠文数12(7点)・14(6点)・15(3点)・16(8点)がある。ここではさらに、珠文数により中分類する。

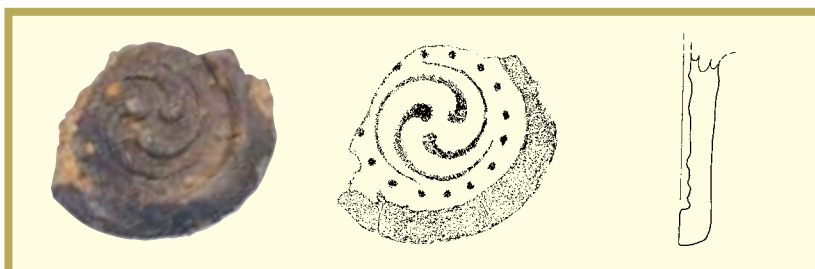
〈 - 2 - a類 (珠文数12・14) 〉

珠文数12・14のものである。珠文数12の中でも、巴頭が鉤状、圏線無し、巴尾長めのものが2点、巴頭が丸、圏線無し、巴尾短いもの(右図)が5点ある。珠文数14の中でも巴頭が鉤状のもの(3点)と、丸いもの(3点)がある。珠文数14は圏線がなく巴尾は長めである。



〈 - 2 - b類 (珠文数15・16) 〉

珠文数15・16のものである。珠文数15はすべて推定であるため16である可能性がある。この類型は11点中10点は圏線がない。この類型の中にも、巴頭が鉤状、巴尾が長いもの(左図)が6点、巴頭が丸、巴尾が長いものが5点ある。





## 軒平瓦

今回出土した軒平瓦は全て、中心飾りの両脇に唐草を配するものであった。分類は中心飾りにのみ着目し、唐草の違いは文中で述べる事とする。

### I類 花紋（仮称）

最も多く出土したものである。左右に花卉のようなものがあるのだが、その花卉の中に線があるもの（下左図）、線ではなく小さな半円があるもの（採取した物のほとんどがこのタイプ）の2タイプある。唐草も5反転、3反転とがある。現在の高知城に葺かれているほとんどの軒平瓦は、3反転唐草に花卉の中が半円のものであり、現高知城に大量に葺かれている。

### II類 三花紋（仮称）

類に次いで多く出土したものである。そのほとんどが、2反転の唐草である。三子葉紋のようなものの先端部に、3つの半円から構成されるものが、それぞれついており、三つの花のように見える。管見では、他城跡に同じ紋様の中心飾りは見られず、この中心飾りの名称は不明である。ただ、高松城跡等から、これと同じ系統かと思われるものが出土しており、それは、高知城のものと違って、3枚の花弁ではなく、3つの点によって表されている。それは、三子葉紋系と解釈されているものと、蓮華紋とされているものがある。



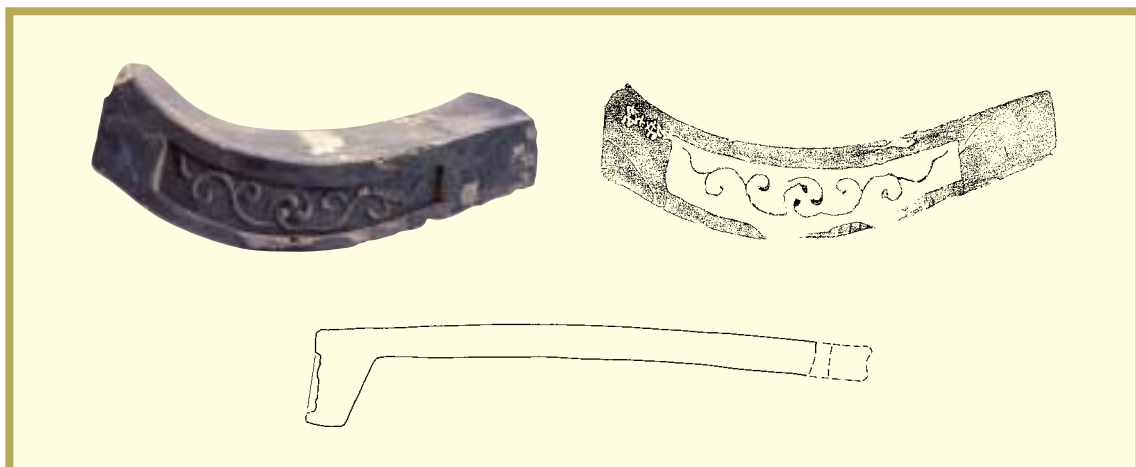
類



類

### III類 巴紋

今回の試掘では4点出土している。そのうち二巴（1点）と三巴（3点）（下図）がある。管見では、この紋様は他城跡からも少量出土している。下図の瓦は3反転の唐草と確認できるが、他は唐草の部分がないので確認できない。下図のものには「安毘」という銘が入っている。



#### IV類 三子葉紋

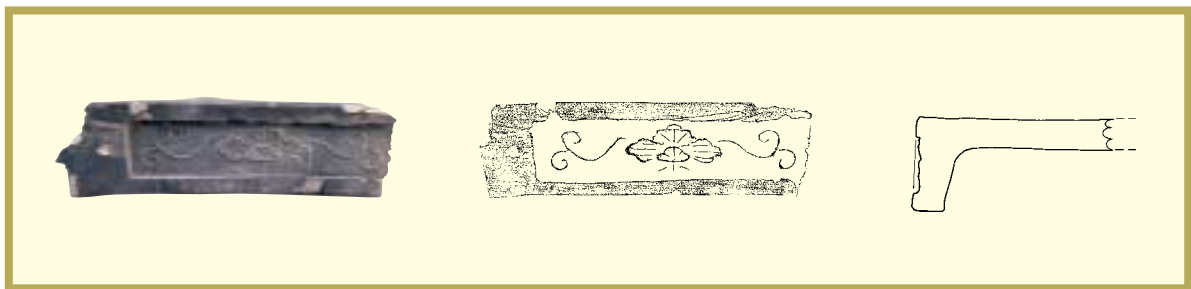
今回の試掘では4点出土してる。唐草は2反転のものが1点確認できるが他はわからない。三子葉紋の4点は葉の形が全て違っている。葉が、唐草のように彎曲しているもの(右図) 同じように彎曲しているが、3枚の葉の下に珠文があるもの 彎曲せずにまっすぐなもの 葉紋が葉の形をしており(先の尖った楕円状にふくらむ)中心葉が前にきており、両脇の葉は後ろにあるように表現されているものがある。 と は共に瓦当面が狭く紋様が小振りで焼成も悪い。共に胎土が粗い特徴を持つ。



と は共に瓦当面が狭く紋様が小振りで焼成も悪い。共に胎土が粗い特徴を持つ。

#### V類

2点出土している。中心飾りが何を表しているのか不明である。4つの花卉状になっており、その下には3本の線が放射状に施される。唐草は2反転である。 類は瓦当面が直線で構成されている事が特徴的である。



#### 刻銘瓦について

今回の試掘では多くの刻銘瓦も出土した。ここでは、その種類とその数量を示しておきたい。アキと読めるものが6種類あり、瓦生産の中心が安芸であった事を示している。安芸瓦の始まりは、『皆山集』によると18世紀であるとされ、瓦屋は多いが鬼師は1軒しかないと記されている(その鬼師が御瓦師となる)。土佐で瓦に刻印が押され始めるのは18世紀後半と考えられている。3(アキ玉)と6(アキ□)は、御台所屋敷跡の発掘調査では確認されていない。

| 番号 | 拓本 | 所刻文字  | 種類   |
|----|----|-------|--|
| 1  |    | アキ    | 平瓦 34<br>丸瓦 32<br>丸棧冠瓦 8<br>軒平瓦 5<br>計79         |
| 2  |    | アキ瓦   | 平瓦 37<br>丸瓦 4<br>丸棧冠瓦 7<br>谷丸瓦 1<br>軒平瓦 2<br>計51 |
| 3  |    | アキ玉か? | 平瓦 3<br>計3                                       |

| 番号 | 拓本 | 所刻文字 | 種類                                       |
|----|----|------|--|
| 4  |    | 安喜   | 平瓦 31<br>丸瓦 20<br>計51                    |
| 5  |    | 安芸   | 平瓦 10<br>丸瓦 16<br>丸棧冠瓦 4<br>軒平瓦 1<br>計31 |
| 6  |    | アキ□  | 平瓦 3<br>軒平瓦 2<br>計5                      |



その他、7 (ナラ瓦宇製) , 8 (奈良瓦宇製) , 9 (ヤス安) , 10 (ヤス兼) , 12 (池亀) , 13 (刻印) , 14 (卯平) , 15 (佐曲) , 20 (御用師卯平) , 21 (片重?) , 22 (ウエ?) も同様に、これまでの高知城の発掘では確認されていない。京の土佐藩邸と、御台所屋敷跡の共通の刻印で、「兼」という銘があったが、これは10の「ヤス兼」であろう事がわかった。

さて、土佐の御瓦師であるが、享保年間より安芸の五郎右衛門家が土佐藩の御瓦師になったようである。それから幕末まで御瓦師として続くようであるが、幕末に土佐藩邸建設の際、建築材料をすべて自国で賄おうとしたが五郎右衛門家には在庫がなく、急造したあまり白瓦を大量に焼いてしまった。そこで隣家の卯平という瓦屋の在庫を送ったところ瓦のできが大変良く、御瓦師を卯平に換えたという事である。それ以降の、御瓦師の銘については不明だったのであるが、今回の14や20によって明らかになった。

| 番号 | 拓本 | 所刻文字  | 種類                  |
|----|----|-------|---------------------|
| 7  |    | ナラ瓦宇製 | 軒平瓦 1<br>計1         |
| 8  |    | 奈良瓦宇製 | 平瓦 1<br>計1          |
| 9  |    | ヤス安   | 丸瓦 1<br>軒平瓦 1<br>計2 |
| 10 |    | ヤス兼   | 平瓦 1<br>計1          |
| 11 |    | 堺     | 平瓦 1<br>計1          |
| 12 |    | 池亀    | 平瓦 1<br>計1          |
| 13 |    | 刻印    | 平瓦 1<br>計1          |
| 14 |    | 卯平    | 平瓦 1<br>計1          |
| 15 |    | 佐曲?   | 軒平棧瓦? 1<br>計1       |

| 番号 | 拓本 | 所刻文字  | 種類                                      |
|----|----|-------|---|
| 16 |    | 中     | 平瓦 3<br>丸瓦 5<br>軒平瓦 1<br>棧瓦 1<br>計10    |
| 17 |    | 御瓦師   | 平瓦 24<br>棧瓦 1<br>丸瓦 7<br>軒平瓦 3<br>計35   |
| 18 |    | 御瓦師   | 平瓦 9<br>丸瓦 4<br>丸棧冠瓦 3<br>計16           |
| 19 |    | 御瓦師   | 平瓦 24<br>丸瓦 4<br>丸棧冠瓦 1<br>軒平瓦 1<br>計30 |
| 20 |    | 御用師卯平 | 平瓦 2<br>丸瓦 1<br>計3                      |
| 21 |    | 片重?   | 平瓦 1<br>計1                              |
| 22 |    | ウエ?   | 平瓦 1<br>計1                              |

## 桐紋瓦の考古学的研究

A調査区の旧石垣裏ゴメから桐紋の軒丸瓦が出土した。桐紋の軒丸瓦が出土したのは四国では高知城跡が初めてである。桐紋瓦について、考古学から現在考えられていることを若干紹介する。

城郭において最も古い桐紋瓦が出土しているのは、天正4年～7年に天主が完成していた安土城跡である。織田信長は、永禄11年に幕府から「桐引両筋の紋」を賜っているため、それ以降の使用は可能であるとされている。天正10年以前のものとしては、五三、五五桐が古い形態のものとして認識できる。しかも、使用する瓦の形態は鬼板・板瓦などの役瓦に限られている。軒丸瓦や軒平瓦での使用は、天正10年よりも後とする。桐紋軒丸瓦は、すでに大坂城、聚楽第で出現しているため、天正11年以降に使用されたものと考えられている。

信長は、対天皇家への威勢と自己の権威の象徴として用い始めたが、そのものを媒体とした支配構造までは完成していなかった。信長は、瓦に唐草紋を使用するだけで城を媒介とした支配を行おうとしていたが、秀吉は金箔瓦や桐紋・菊紋瓦の使用を許すことで全国の支配をしていったと考えられている。

城郭瓦からみた秀吉の政治的政策をみると、桐紋・菊紋瓦の城郭に於ける使用は、地域的・時的に、秀吉の天下統一の為の分国政策に伴う築城政策に大きく関係している。天正16年後陽成天皇のもと聚楽第に行幸したおり、多くの武将や家来たちが参列し官位の叙任を受けている。叙任にかなったものは、最低でも従五位下クラスの家来や武将であり、これらの家来や武将に桐紋や菊紋の使用が許されたとされている。織田信長が、朝廷から拝領したことに端を発した「桐紋・菊紋」の権威の象徴としての使用法は、信長の短命から信長期はその利用は少ない。秀吉の時期になると自ら関白になることによって官位叙任による家臣の支配を行う政策に「桐紋・菊紋」を利用し、秀吉は天正14年に太政大臣の位と豊臣朝臣の姓を賜ると同時に、朝廷から桐紋・菊紋を拝領したと考えられている。

桐紋使用の衰退については、『多聞院日記』によると、秀吉は天正19(1581)年に桐紋・菊紋の使用を制限している。秀吉は、文禄・慶長の役をひかえ家臣の支配を押し進める結果となるが、これが桐紋・菊紋の増加を生む結果となり、その後秀吉は桐紋・菊紋の停止に踏み切った。豊臣から徳川の支配に移った慶長16(1611)年家康は、朝廷の桐紋・菊紋の恩賜を辞退している。その後徳川家康は、豊臣政権下とは異なる時代の宣言をしたのではないかとされ、家康配下の諸大名は、桐紋・菊紋を遺棄する発端になったと考えられている。

## 開徳館の桐紋と三ノ丸出土の桐紋



この2つの桐紋瓦の写真は、高知城本丸一階の開徳館に展示されているものである。昭和5年に、高知市潮江上町の方から寄託された。高知城管理事務所の資料台帳には「浦戸城二使用センモノト云伝フ」「桃山城の瓦ともあり浦戸城に使用とあるも、名札の間違いならずや」とある。左の写真は、七四の桐である。中心葉の上には、珠文が描かれている。三ノ丸出土の桐紋と比較してみると、この2つは、両脇の葉が外側に開いている。三ノ丸出土の桐紋は、中心葉と両脇の葉に前後がなかったが、この桐紋ははっきりと中心葉が前にきている。また三ノ丸出土の桐紋には見られない欠刻が見られる。蕾の形も違っている。葉脈は三ノ丸出土の桐紋に比べて垂れている。三ノ丸出土の桐紋は、線で紋様が描かれており、紋様が平坦であるが、この桐紋の紋様は立体的に描かれている。



この桐紋ははっきりと中心葉が前にきている。また三ノ丸出土の桐紋には見られない欠刻が見られる。蕾の形も違っている。葉脈は三ノ丸出土の桐紋に比べて垂れている。三ノ丸出土の桐紋は、線で紋様が描かれており、紋様が平坦であるが、この桐紋の紋様は立体的に描かれている。

## 現在の高知城瓦

この写真は、本丸の堀である。この軒丸瓦の三巴は、-1類の、巴頭が丸く、圏線がなく、巴尾が長いというタイプにあたる。軒平瓦については、左は類の三巴の中心飾りのタイプに当たる。右は類の左右の花弁の中に、線ではなく小さな半円が有るもの(採取した物のほとんどがこのタイプ)のタイプである。この三巴軒丸瓦と、花の軒平瓦が、現在の高知城に葺かれているほとんどである。





# まとめ

## 1. 高知城出土の桐紋瓦の時期の問題

今回高知城跡で出土した桐紋軒丸瓦は、A区の旧石垣裏ゴメ部分の上層地点から出土している。石垣は、シノギ角の算木状の積み方や角脇石の入り方など構築技術とその使用石材や、石垣盛土から近世の遺物は出土せず中世で占められていることから考えても天正年間に構築された石垣であると考えた。さらにこの旧石垣も上2石目は、山内期に改修されていることから、桐紋瓦はこの改修の段階で混入した遺物として考えることができる。このような出土状況から、山内改修前の旧石垣構築段階にはすでに使用されていたと考えられ、その桐紋瓦が葺かれていた建物は旧石垣を利用し存在していた可能性がでてくる。これらのことから、桐紋瓦は高知城三ノ丸の礎石建物に葺いていた証しとなる。さらに桐紋瓦と同時期に葺かれていたと考えられる巴紋の軒丸瓦も出土している。この時期を推考すると、秀吉が拜領を許された天正14(1586)年以降から長宗我部氏が浦戸城を構築した天正19(1591)年の間になってくる。

天正16年正月に実施した長宗我部氏による検地では既に城郭の普請が終わっているので、前年の天正15(1587)年にはこの桐紋瓦が使用された可能性がある。さらに長宗我部提書4条に「桐・菊」紋の使用を禁止する条項を文禄5(1596)年に定めている。これらのことから既に文献では長宗我部氏が桐紋・菊紋を使用していたことがわかるし、さらに有力家臣が紋の使用をしたため禁止する提書を定めた可能性がある。調査では出土状況から、長宗我部期に使用された桐紋瓦であると推考したが、今後山内期の段階で明確に桐紋瓦が使用されたことがわかる資料が発見されれば、瓦の胎土及び紋様意匠等の考察を含め長宗我部使用を再考する必要がでてくる。



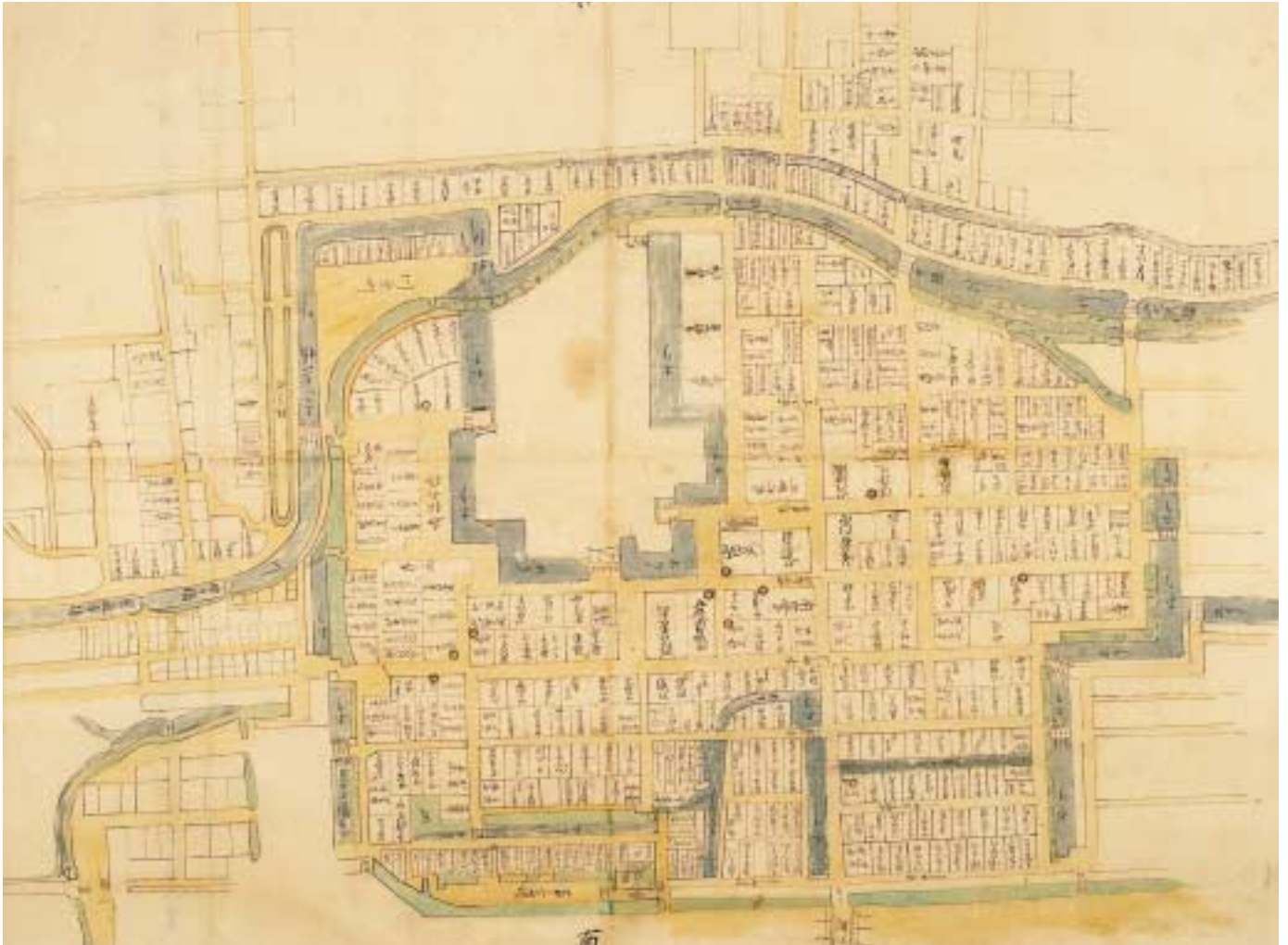
天守閣と旧石垣・桐紋瓦

## 2. 長宗我部地検帳と高知城

長宗我部氏が、岡豊から大高坂に移転したのは天正16(1588)年とされているが、それよりも早い時期に移転した可能性がたかまってきた。長宗我部地検帳によると、天正16年正月に於ける大高坂郷の状態が極めて明白に示されている。地検帳に記載されてある「大テンス」は、「大天主」ではないかと考えられており、この時期本丸には既に天守の建物が存在していたことになる。さらに「御土居」と記載されている場所は、長宗我部氏の居館を示すものと考えられている。しかし今後地検帳記載の詳細な検討を待つことになるが、現段階ではこの大高坂山には長宗我部氏による城郭が普請されていたと考えることにする。

|                     |                         |
|---------------------|-------------------------|
| 弓場ヤシキ               | 同(大高坂村) 同分(国沢分)         |
| 一ノ廿代 出廿八代五分<br>下ヤシキ | 横山修理給                   |
| 大テンスノ下東ウラ           | 同 同分 今八田所六衛門持           |
| 一ノ廿四代 下ヤシキ          | 西浜勘兵衛給                  |
| アへ溝懸テ               | 同 同分 前八国沢左馬丞分<br>竹島木兵衛分 |
| 一ノ四十八代三分 上ヤシキ       | 御土居                     |

『高知県史』中世編より抜粋



享和元年・文化8年写高知御家中等庭園 (安芸市立歴史民俗資料館所蔵)

本丸周辺は既に城郭が構築されていたであろうが、三ノ丸の普請が問題となる場所である。今回の調査で、桐紋軒丸瓦が出土したことで、礎石建物が存在していたと推定した。旧石垣においても慶長期（1596～1614年）以前の石垣の特徴を備えていることも含めて考えると、現段階では三ノ丸の旧石垣普請は天正15年から16年の時期に絞り込むことができる。三ノ丸で検出された旧石垣が何故この場所に構築されたかを推察すると、三ノ丸の地山突出面を利用して構築されていることから、正保の城絵図に描かれている丑寅櫓の前身と考えられる礎石建物の基礎部分の役割を果たす石垣とも考えられる。

#### 参考文献

- 1) 黒田慶一「豊臣時代の桐紋瓦について」『織豊城郭』第2号 織豊期城郭研究会 1995年
- 2) 木戸雅寿「織豊期城郭にみられる桐紋瓦・菊紋瓦について」『織豊城郭』第2号 織豊期城郭研究会 1995年
- 3) 『高知市史』上巻 高知市 1958年
- 4) 『高知城石垣総合調査報告書』高知県教育委員会 2000年
- 5) 『長宗我部地検帳』高知県立図書館 1957年
- 6) 『高知県史』中世編 高知県 1971年
- 7) 『高知城跡』財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995年
- 8) 国立歴史民俗博物館『天下統一と城』読売新聞社 2000年
- 9) 『織豊期城郭の瓦』織豊期城郭研究会 1994年
- 10) 加藤理文「金箔瓦使用城郭から見た信長・秀吉の城郭政策」『織豊城郭』第2号 織豊期城郭研究会 1995年
- 11) 『清洲城下町遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1997年
- 12) 『史跡高知城跡 - 御台所屋敷跡発掘調査報告書』高知県教育委員会 1994年
- 13) 『土佐國史料類纂「皆山集」』第三巻 高知県
- 14) 北垣聰一郎「わが国における伝統的積石技術とその課題」『東大阪短期大学研究紀要』2000年
- 15) 『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』香川県教育委員会 1987年
- 16) 『史跡 岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』岡山市教育委員会 1997年



# 報告書抄録

| ふりがな         | こうちじょうさんのまるあと                               |          |                  |                   |                    |   |                        |                      |
|--------------|---|----------|------------------|-------------------|--------------------|---|------------------------|----------------------|
| 書名           | 高知城三ノ丸跡                                     |          |                  |                   |                    |   |                        |                      |
| 副書名          | 石垣整備事業に伴う試掘確認調査概要報告書                        |          |                  |                   |                    |   |                        |                      |
| 編著者名         | 松田直則・大野佳代子・佐々木志穂                            |          |                  |                   |                    |   |                        |                      |
| 編集機関         | 財団法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター                       |          |                  |                   |                    |   |                        |                      |
| 所在地          | 〒783-0006 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL.088-864-0671 |          |                  |                   |                    |   |                        |                      |
| 発行年月日        | 西暦2001年3月31日                                |          |                  |                   |                    |   |                        |                      |
| ふりがな<br>所収遺跡 | ふりがな<br>所在地                                 | コード      |                  | 北緯<br>。' "        | 東経<br>。' "         | 調査期間  | 調査面積<br>m <sup>2</sup> | 調査原因                 |
|              |   | 市町村      | 遺跡番号             |                   |                    |   |                        |                      |
| 高知城跡         | 〒780-0850<br>高知県高知<br>市丸ノ内                  | 39201    | 010081<br>010082 | 33°<br>33'<br>30" | 133°<br>32'<br>00" | 平成12年<br>8月1日<br>、<br>平成12年<br>11月17日                           | 320m <sup>2</sup>      | 三ノ丸石<br>垣整備事<br>業に伴う |
| 所収遺跡名        | 種別  | 主な時代     |                  | 主な遺構              |                    | 主な遺物  | 特記事項                   |                      |
| 高知城跡         | 城館  | 中世<br>近世 |                  | 石垣<br>水路遺構        |                    | 土師質土器<br>貿易陶磁器<br>国産陶器<br>肥前系磁器<br>肥前系陶器<br>瀬戸系陶器<br>瓦<br>鉄・石製品 | 天正年間の石垣と桐紋<br>軒丸瓦が出土   |                      |



## 高知城三ノ丸跡

石垣整備事業に伴う試掘確認調査概要報告書

2001年3月

編集 財団法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel.088-864-0671

印刷 川北印刷株式会社